２０２０年１０月２０日（火）

老球の細道５６８号

偉大なコーチ山崎先生の思い出〈PART・V〉

会津バスケットボール協会　室　井　冨　仁

山崎先生との出会いの最高のハイライトは何と言っても会津高校時代のアメリカ遠征だろう。１９９６年に喜多方女子高校から会津高校へ転勤した時、先生からアメリカ遠征の話を打診された。長崎鶴鳴はすでに福島国体時にアメリカ遠征を実施しており、次回は日本の男子チームも同行してくれるようアメリカの方から要請があったという。そこで声がかかったのが私の会津高校と長年山崎先生と懇意にしていた四国の名将富田先生率いる徳島城北高校男女部であった。

転勤した１年目はチームを立て直すことで精いっぱいでアメリカの話は見送った。３年目に実現することを目標に、保護者会の設立、OB 会のバックアップ、学校側の理解、そして選手の意識改革と少しずつ準備を進めてきた。その当時毎日頭をよぎっていた言葉があった。坂本龍馬の「この世に生を受けたるは、ことをなすことにあり」。若い頃は何事も凄いことをしたい、凄いものを見たい、凄い指導者になりたいと思い続けたものだった。

２年目の１９９７年、企画書もまとまり、選手の参加希望人数も多くなり、保護者、OB 会の支援体制も整って、実施できる見通しが明るくなってきた。そこで有言実行の狼煙を上げ私自身の決意をさらに強くした。もう後戻りできない。

ところが、映画、ドラマと同じように、こういう時に何かと邪魔が入り壁が立ちふさがる。遠征日程が学校の夏休み補習期間とバッティングしてしまったため、多くの教員から大反対にあった。私としては、夏休みの補習であり、自己負担の希望参加だったので何ら問題はないと思っていた。今までにない新しいことをやろうとすると必ず反対する人たちがいるのは世の常である。当時の校長は賛成であったのだが、国公立大学に何人合格させたかに情熱を燃やす先生方に大反対された。

「補習は授業の一環である。それを休んで外国旅行なんてとんでもない」

「高校生の部活でそこまでやる必要があるのか」

「事故があったら誰が責任をとるのか」

[蛇足：その後会津高校の野球部が夏の高校野球県大会でベスト４に進出した際、夏休みの補習期間であったのにもかかわらず、補習を休みにして全校応援に繰り出すよう声高く働きかけたのはバスケット部のアメリカ遠征に強硬に反対した先生たちだった]

何度も職員会、部活動顧問会などを開いて協議したが、最後は保護者会、OB 会などが当時の校長へ直談判したので先生たちも認めざるをえなくなった。3 年目の４月に入ってからのことだった。それまで山崎先生には多大なる心配をかけたが、学校側の結論が出るまで温かく待っていてくれた。「願えば　かなえられる」

１９９８年7月19日（日)、選手２２名（３年生４名、２年生１０名、１年生８名)、保護者１名、OB 会３名、そして引率の私の計２７名で、いざアメリカへ。〈もうちょい続く〉